

日々新たにされて生きる

―溝口正 召天十周年記念会講話―

武井 陽一

讃美歌 三五五 五三二 二七〇

コリント信徒への手紙 口

四章 7 ～ 11 節

わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされません。私たちは、いつもイエスの死を体にまとっています。イエスの命がこの体にあられるために。わたしたちは生きています。死ぬはずのこのために、イエスの命が現れるために。

四章 19 ～ 18 節

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたした

ちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

五章 17 節

キリストと結ばれる人はだれでも新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

六章 1 ～ 2 節

神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。なぜなら「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日にわたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

溝口正先生が天に召される前は、浜松聖書集会ではイースター集会を特別に開きませんでした。ある時、教会出身の妻めぐみが「先生、イースターを何でしないのですか」とたずねました。そしたら先生は満面の笑みを浮

かべて「毎日が『イースター』なんだよね」と語られました。また「日曜日ごとがイースター」であると教えられました。

ユダヤ教の安息日は金曜の夕方の日没とともに始まり土曜日の夕方の日没までであります。原始キリストの信徒たちは、日曜日を聖日として礼拝を守るようになりました。これはきわめて重大な事実であります。この背後には、イエスが金曜日に十字架にかけられ墓に葬られたが、三日目の日曜日に復活したという出来事があつたのであります。すなわち、イエスの復活を喜び覚えて、日曜日に集会をするようになったのであります。使徒たちの宣教の中心も「主はよみがえられた」ということにありました。原始キリスト教とユダヤ教徒の決別は、イエスの復活に基づくものであつたことは明らかであります。無教会では特別にイースターという日を設けません。原始キリスト教会のように、日曜毎に主の復活を覚えて希望を新たにしたいと思うのであります。：

(一九九〇年四月『復活』二九五号)

溝口先生が最期に遺された詩より、本日の演題を「日々新たにされて生きる」として語るように示されました。お読みします。

### 内なる人は日々新たに

「外なる人」はだれでも

衰えてやがて死に至る

されど「内なる人」は

主の命が注がれている限り

日々新たにされ

御国の希望に輝いて生きる。

「外なる人」の命は、

百歳まで生かされる人もあれば

今宵取り去られる人もいる。

長き短かきは、主のみ手のうちにある。

主のよみがえりを信じる者の

「内なる人」は 復活の希望に輝きを増す。

(二〇〇六年九月『復活』四七四号)

イエス様のおかげで自分の罪がゆるされ、復活し、天に在っても生き、親しき方々との交わりがゆるされる。ここそ最大の希望です。この復活の希望を抱いて「日々新たにされて生きる」ようにと、溝口先生は繰り返し勧められ、『復活』（溝口正主筆の月刊誌）に書き遺しました。本日はこれら先生の文章をまとめて読んでみます。

浜松聖書集會は一九五三年三月二六日、溝口先生と春江さんの結婚式をもって誕生しました。一九六一年一月二五日に矢内原忠雄が召天、翌年の一九六二年より、クリスマス集會が同時に矢内原忠雄記念キリスト教講演會となりました。

その三回目の講演会で、先生は「教育の危機とキリスト教」と題して講演しました。その冒頭でまず「クリスマスを迎える心構え」として参加者に問いかけました。

今日はクリスマスですが、皆さんはどういう心構えで集まって来られましたか。：何時も出ている習慣、惰性で出てきたというならば、この世の集りと何ら変

るところがありません。クリスマスは年中行事ではありません。私共の心の全部、全人格を傾倒して、天地の造り主に感謝と讚美を捧ぐべき厳肅な、そして歓喜に満ちた時なのです。：イエス・キリストを、私共人間の中へとお遣わし下さった天のお父様が、あなた方一人一人に招待状を出して、今日ここに招待して下さいたのであります。神様に御招待いただいた私共は、手ぶらで御前に出てきてはいまいか。矢内原先生がよく申されたことでもあります。「神の御前に出る時に、手ぶらで出てはいけない。」これはクリスマスに限ったことではありませんが、特に今日は、キリストのお誕生日に、神様からお招きいただいたのでありますから、特に、手ぶらでは困る。如何なる祈り、感謝、讚美を持って出てきたということは人それぞれに違うでしょうが、とにかく、手ぶらでは困ると私は思います。

皆さんは本日の溝口正召天一〇周年記念・イースター祝會に参加するにあたり、溝口先生のこの問いかけにどのように答えられますか。先生は「私は今日、ただ今から申し上げるような感謝と讚美をもってこの集會に出て

参りました」と次のように続けました。

天のお父さま、私が心の奥底から、こんこんと溢れ出る喜びを抱いて、この一年を生きてくることができましたのは、イエス様のおかげです。自分の足元から、真直ぐに続いて永遠の御国まで見えるあざやかな希望の道を、昨日も今日も歩ませていただけなのは、イエス様のおかげです。あなたが、毎朝毎晩、イエスの十字架を私に示して、「お前の罪をゆるしてあげる」と言って下さったればこそ、私は、ニコニコしながら元気に暮らしてることができたのです。もしイエス様がお生れにならなかつたとしたら、罪のゆるしの平安も、復活の喜びも、神の国の希望も、どれ一つもない真暗闇のこの世の中を、私は一体どんな人間となって、今頃さ迷い続けていたことでしょう。罪と汚れの泥沼の中で、自分で自分をかき破りながら、心の底の空しさに耐え切れず、肉体的、表面的な刺激でごまかしながら、何かを望みつつも、何もつかみ得ず、やけのやんぱちになりながら、表面をつくろい、外から見れば、ネクタイしめてなんとか生きている。内から見ると空っぽ

で、絶望しながらうめいている。私はきつと、そんな人間になっていたに違いない。それを思うと私の人生は、イエス様によって全く作り変えられたことを、しみじみ実感いたします。平安も喜びも、希望も、そして最近では悲しみさえも、そうです、苦しみさえも、すべてイエス様から頂いたものであることがわかってきました。私にとって、イエス様は、すべてであります。全部です。イエス様なくして私は生きられないのですから、私の救主イエス様の誕生日を迎えて、私は手放して泣きたい程、うれしくてしようがないありがたいたくてしようがないのであります。イエス様、本当にようこそお生れ下さいました。」これが私の感謝と讃美であります。

天のお父様は、大きな、暖かい手を一ぱいに広げて、さあ、私の愛の中にお入りなさいといつて、皆さん一人一人をご招待下さったのであります。：

（「教育の危機とキリスト教」

1964年12月20日「復活」23号）

溝口先生は喜びに溢れた讃美、感謝をさらに続いて語り、そして講演の本題として、教育の危機的な状況、「国

家が教育を統制し、干渉することが狡猾に進められて、ほぼ完成されたといつてよい状況になってしまった（教育の中央主権化）ことを指摘しました。1964年といえば、東京オリンピックを開催した年で、私は小学一年生でした。私はそんな状況をもちろんわかりませんでした。因みに浜松の市街地に自衛隊の戦車がパレードをして、松本美実<sup>よしみ</sup>牧師と溝口先生が抗議して平和行進したのが、1964年でした。

先立つ1962年、第一回の矢内原記念講演会にて、溝口先生は、危機的な状況の中、社会的な平和運動や職場での労働運動をするにあたり、「単なる外なる働きや活動だけでは限界がある。キリスト者として日々新たにされることこそが大切である」と語りました。

外なる環境の変化ではなくて、我々の内なる生命が神によって日に日に新たにされることによつてのみ、一つの職場にじっくり腰を落つけ、理想に堅く立って、澁刺として問題と取組むことができるのであります。即ち神様との間に毎日生ける交わりが成立しているかどうかということ、キリストの十字

架を仰いで、日に日に新しい生命に生まれ変わっているかどうかということこそ問題の中心点であるのです。これあって、はじめて自分の職業を神様から与えられた使命として、積極的な意欲をもつて働くことができると信じます。しかも、このことに気付いている人は極めて少ない。

（「現代の危機とクリスマス」

1962年12月23日「復活」8号）

先日の集会にて、浜松盲学校の同僚であった大屋智代さんが、溝口先生はいつも、ニコニコ笑顔にあふれながら、子ども、生徒たちと交わっていた、だからこそ溝口先生を慕い、浜松聖書集會に導かれたと語りました。先生の詩「キリストと共に」をお読みします。

### キリストと共に

朝目が覚めたら まず第一番に  
キリストのことを思いたい。

ご飯をいただく時には  
家族みんなが一つ心になって

キリストに感謝をささげよう。

人と話をする時には

私の心の中に

いつも キリストが宿っていてもらいたい。

勤めに行く道も 帰る道も

キリストのことだけを思って……

ああ そうなったら どんなにすばらしいだろう。

寝る時がきたら おふとんの上に座って

キリストにありがとうを言おう。

そして この世をお別れする時がきたら

キリストにあつて喜んで死にたいものだ。

(1966年12月 「復活」37号)

私はイエス様にこれほどの感謝や讚美の声をあげていません。いつも「手ぶらで日々生活している」と告白せざるを得ません。溝口先生のように、困難な時にも悲しみの時にも、イエス様にあつて日々新たにされて喜びにあふれながら歩みたいと思わされました。

社会全体が闇に包まれ前途は暗くとも、失望せずに毎日を新しく生かされて歩むようにと先生は勧めました。

1986年の新年所感に次のように記しました。

……しかし私は希望を捨てない。私には『見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である』(コリント

6・2)との嘉信が聞こえて来るからである。さらに

『わたしたちは、見えるものではなく、見えぬものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えぬものは永遠につづくのである』(コリント4・18)

ということも知らされている。目に見える日本の前途はいかに暗くとも、目に見えぬ真実の日本はきわめて明るいのである。戦争放棄・無軍備の平和の国日本、愛の連帯による人類尊重の国日本……そのような日本が世界平和創造の先頭に立ち、発展途上国への奉仕に全力をつくす姿を私は夢見て胸は高鳴る。目に見えぬ日本のために働く者は、新しく造られた日本人でなければできないであろう。だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。

(コリント5・17)ここに新しい日本人となる道がある。この新しさは一過性の気分的なものではなく、永遠に新しく在り続ける道である。今年も、ここに希望をおいて、毎日、を、新しく、生かされて、働きたい。

1986年1月「毎日を新しく生かされる―新年所感」

「復活」233号

「目に見える日本の前途はいかに暗くとも、目に見えぬ真実の日本はきわめて明るい」と戦争放棄、無軍備の平和の国、愛の連帯、世界平和創造の先頭に立つために新しい日本人となる道を指し示しました。今は目に見えぬ真実な日本・世界のために働く実例として「発展途上国への奉仕に全力をつくす姿を私は夢見て胸は高鳴る」と記しました。浜松聖書集会に加わった伊藤邦幸・聡美夫妻のことをも覚えて記されたと思いますが、現在では中村哲医師たちが、ペンシャワールにあり、医療だけでなく、灌漑の整備、農業支援など住民全体のために活動している姿が浮かびます。また、バングラデシユのラルシユ・マイメイシンにて岩本直美さんたちが、イスラム教

徒もキリスト者も共に生活している姿が浮かびます。同じ年の六月に溝口先生は還暦を迎えるにあたり、自分の内に聖霊がいろいろな姿をとり、その時々に関われたことを感謝して証ししました。

## 還 暦

イエスの弟子達は、十字架から七週間後の五旬節(ペンテコステ)の日に、生き生きとして働く、新しい力に突き動かされる経験をした。彼らはイエスを捨てて逃げ去った臆病な人間から、大胆にキリストの福音を証する人間へと全面的に変革された。聖霊が彼らの上にくんだり、彼らの内に宿ったからである。

私は聖霊を取り出して人に見せることはできない。聖霊が私の内に働き給う神である。私は聖霊を定義する言葉を知らない。聖霊は私の内に働き給う神の力である。私に祈りをうながすキリストの力である。私のような罪人が、主の十字架を指し示しつつ、罪ゆるされる喜びを語り続けて三十数年間を、ただひたすらに走って来れたのは、私の内に働き給う聖霊の力によるのである。聖霊は私を前に向かって押し出し常に激励し

助けてくださった。ある時はやさしく、ある時はきびしく、ある時は激しく、そしていとも静かに。

これは、私の内面のできごとであって、誰にもわかってもらえない霊的な消息であろう。しかし事実である。私は来る六月五日で還暦を迎える。うつぼつして沸き興るこの感謝と賛美の思いを、誰がわかってくれらるであろうか。私は残された地上の生涯を全面的に聖霊の導きに委ねて前進したいと切に願うものである。還暦を迎えるに当り示された聖句は次の二つである。

子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり　マタイ九・2  
人もし我に従い来らんとせば、

己をすて、己が十字架を負いて我に従へ

マタイ八・34

(1986年5月「復活」237号)

四月一日、私の父がさつと天に召されました。九〇歳でした。父が北海道大学在学中、伯父(母の兄)の導きがあり、内村鑑三と同じく二期生であった宮部金吾と伯父との交わりにより札幌独立教会に通ったことがあります。私は父が時々、聖書を読んでいる姿をみながら育ち、

高校の恩師・宮部健先生、続いて浜松の地で、伊藤邦幸・聡美夫妻、さらに浜松聖書集會にも導かれました。溝口正先生や皆さんと出会い、今の自分があります。二〇歳で浜松医大に入学して、その三年後に山猿庵読書會と浜松聖書集會に参加するに至りました。めぐみと結婚して、聡美先生召天後に、三〇歳で聖隷三方原病院と風声寮での生活へと導かれました。邦幸先生召天後、デンマーク牧場「こどもの家」の仲間たちに出会い、溝口正先生が召天後、すぐに「こひつじ診療所」を開院して、早一〇年が経ちました。四月一日、私も還暦を迎えました。溝口先生のこの還暦にあたっての文章を読み、私もこれまでの恩恵、御霊の不思議な導きに深く感謝いたしました。

溝口先生は、一九九〇年、一九九三年、一九九四年の新年にも、また聖隷学園に勤務して高校生に向けても、日々新たにされて、毎朝「おめでとう」と感謝しながら楽しく歩むようと、勧められました。二つ文章を読みます。

一日一生　新年にあたって　高校礼拝講話

人間は毎日生かされるだけでなく『内なる人は日ごと新しくされていく』(コリント四・16)と聖書に書かれています。これは毎日キリストを礼拝し、霊的な生ける交わりの中に入ることによって、日毎に新しい命に生かされるということです。：

「一日は、私どもにとりては短き一生涯であります。

朝生まれ、昼働き、夜は復活の希望をいだいて眠りの床につきます。かくて私どもには一年に三百六十五回の生涯があります。なんと楽しいことではありませんか。」(続一日一生)

一日一生であります。キリストにあるならば、この内村鑑三の言葉を実際に生きることができるのであります。

(1990年1月 「復活」280号)

### 毎日・毎朝おめでとう

キリスト救いの光を全身に浴びながら生きるとき、我々は毎日新しく生れて、毎日新しい人生を生きることができのです。「新年おめでとう」どころではなく、「毎日、毎朝おめでとう」となるのであります。

こうしてキリストにあるならば、新年も、また、毎日も、一日一日が本質的な意味で新しさを獲得するのであります。なんと楽しいことではありませんか。闇の生活を送るか、光の生涯を生きるか、古いままで暮すか、新しく生れるか。それは光であるキリストを受け入れるか否かの一点にかかっていることを、聖書は告げているのであります。

(1994年1月 「復活」328号)

最後に、「みぎわ25号」の巻頭言に載せた溝口先生の「今朝の祈り」を読みます。

### 今朝の祈り

私の罪を赦したまえ。日本国民の中に悔改めの心を起したまえ。沖縄の同胞の上に主の平和の喜びの日を来たらせたまえ。世界のキリスト者が主の御心にならう平和を求めて十字架を仰ぐことができますように。飢え、貧困、病氣、苦しむ者らの上に救いの御手を伸ばしたまえ。

祈り終えて天より御声を聴く。「子よ、心安かれ、

汝の罪赦されたり」と。感謝と賛美をもって一日の第一歩を踏み出す。主よ御心を成したまえ。主に栄光あれ。

(2005年6月「復活」461号)

キリストの愛にかり立てられながら、キリストに罪のゆるしを請いつつ、新生の恵みにあずかり、日々新たにされて、導かれて、「目に見えぬ真実な日本」について大胆に希望を語り、また目に見える社会の中にある闇の勢力に抗して、少しなりとも警告を発し続けたいと願います。信仰と行いとはまったく一つであることを溝口先生より深く教えられました。その確かな裏付けとして、溝口先生がイエス様にありて喜びにあふれた一日一日の生活があつたことを、いろいろな苦難や悲しみを負われた時にも、イエス様にあり日々新たにされて、心静かに歩まれたことを、本日は先生が遺された文章を多く読んで、確認し合うことがゆるされました。ハレルヤ、心より感謝いたします。

(二〇一七年四月二三日)